

## 「新元号と新天皇のお名前・宮号（呼び名）の出どころ」

……『<sup>まんようしゅう</sup>万葉集』や『<sup>ししよたいぜん</sup>四書大全』という古くてたいへん価値のある書物で勉強をしていた私たちの<sup>だい</sup>大先輩（昔の黒羽藩校作新館の生徒、今の黒羽小学校の児童）たち……

足利大学工学部・共通教育センター講師 大沼美雄

『<sup>まんようしゅう</sup>万葉集』という本から採られた「令和」という言葉、昔のお殿様からいただいた『万葉集』で勉強に励んでいた黒小の大先輩たち

私は昔の黒羽町<sup>おおあざ</sup>黒羽田町（今の<sup>おほあざ</sup>大田原市黒羽田町）の生まれです。昭和45年3月に黒羽小学校を卒業しました。今はもう61歳になりました。現在、私は栃木県足利市にある足利大学で講師をしています。もうすぐ「平成」という時代が終わります。そして、「<sup>れいわ</sup>令和」という新しい時代がやってまいります。新聞やテレビ、又はおとうさんやおかあさん、おじいさんやおばあさんなどから聞いてあるいは知っている人もいかもしれませんが、「令和」という言葉の出どころは奈良時代に作られた『<sup>まんようしゅう</sup>万葉集』という歌の本とのことです。

私が勤めている足利大学のすぐそばに日本で最も歴史のある学校としてとても有名な足利学校があります。その足利学校は古くてたいへん価値のある本をたくさん持っている学校として非常に有名ですが、「令和」という言葉の出どころが『万葉集』だということが発表された瞬間、足利学校の人たちがその『万葉集』が校内にあるかどうか探してみたところ、もちろんあったということでした。たいへん話題になりました。足利学校にあったのは文化2年（1805年）8月に印刷されて世に出た20冊で<sup>ひとくみ</sup>一組という本でした。

実は足利学校にあった『万葉集』、文化2年（1805年）8月に印刷されて世に出た全部で20冊からなる『万葉集』はわが黒羽小学校（昔の黒羽藩校作新館）にもありました。ただ虫に食われたり、くさってきたりしては大変だということで今は学校から歩いて15分ぐらいの所にある「黒羽芭蕉の館」に移され、大切に保管されております。

その昔は黒小にあったが、今は「黒羽芭蕉の館」にある『万葉集』にはよく見てみると、その一冊一冊に「黒羽藩作新館」という<sup>ざうしよいん</sup>蔵書印と呼ばれるはんこが押されていることがわかります。それは「これはわが黒羽藩校作新館が持っているたいへん価値のある本だよ。わが作新館の持ち物だよ。」という意味でございます。

ところで、その文化2年（1805年）8月に世に出た全部で20冊からなる『万葉集』はいつから作新館の持ち物になったのでしょうか。

実はその『万葉集』の第一冊めの表紙のうらに次のような書き込みがあります。

作新館者旧封黒羽城之学也今茲奉維新之命納封土於朝廷徙居於闕下於是附私蔵之書若干卷於此館以公諸天下焉

明治四年辛未八月望前一日

從五位丹治真人大関増勤

これは、ひらがなやカタカナが1つも混じっていない漢文と呼ばれる文章です。昔は漢文で書けたり漢文を読めたりする人はそれなりにいたようですが、今はほとんどいません。でも、私は国学院大学や大東文化大学大学院という学校で漢文を本気で勉強してきたのでかなり正確に読むことができます。実はあれは

作新館は旧封黒羽城の学なり。今茲維新の命を奉け、封土を朝廷に納め、居を闕下に徙す。是に於て私蔵の書若干卷を此の館に附し、以て諸を天下に公にす。

明治四年辛未八月望前一日

從五位丹治真人大関増勤

と読みます。これで読み方はわかったかもしれませんが、意味はなかなかわからないでしょう。実はこれは

作新館は（私の）昔の領土、その中心に立っていた黒羽城内にある学校である。（私は）今年、（明治）維新という大改革の仰せを受け入れ、（二年前には）領土を天皇にお返しし、住居を（黒羽から）天皇のお膝元（の東京）に移した。これを機会に（私は）個人的に所蔵して来た書物の中の数巻をこの（作新）館に寄付し、そのことでもってそれらを世間に（広く）公開することにしたのである。（その中の一部がこの『万葉集』全20冊である。）

明治4年8月14日　　今は「從五位」という位に位置付けられている昔の姓は丹治真人、今の姓は大関、名は増勤である。という意味です。

この書き込みは黒羽藩の最後のお殿様大関増勤が明治4年8月14日（1871年9月27日）に書いたものです。この書き込みによれば、『万葉集』全20冊は元々は黒羽藩の最後のお殿様大関増勤の個人的な持ち物でした。でも、明治維新という大改革を受け、明治4年8月14日（1871年9月27日）に作新館に寄付され、以後は作新館の持ち物になったということでもあります。明治5年7月に調査が行われた時には確かに昔の黒羽藩校作新館の中にあつたことが確認できます。私たちの大先輩である当時の作新館の生徒たちは元のお殿様からいただいた本でなおいっそう勉強に励んでいたことが想像できます。

ただ、明治18年（1885年）、その作新館は「大関私学作新館」というそれまでの名前を失って私立から公立に変わります。その時に起きた大変革により、その中であつた本はあの『万葉集』も含めて行き場を失って大変なことになってしまいましたが、結局はその中の主要な部分は『万葉集』も含めて昔のお殿様であつた大関家のものとなり、それらはしばらくその大関家が保管して来ておりましたが、大正4年（1915年）11月に大関家（大関増勤さんのお子様の増輝さん）から寄付を受け、再び黒羽小学校のものとなっております。

『四書大全』という本の大全集の中に入っている『中庸』という本から採られた新天皇のお名前と宮号、中国が「明」と名乗っていた時代に作られ、日本に渡って来た後、読みやすいように工夫が施された『四書大全』で勉強や研究に励んでいた黒小の大先輩たち

古くてたいへん価値のある本をたくさん持っている学校として非常に有名な足利学校には『四書大全』という本の大全集もあります。中国という国には昔「明」と名乗っていた時期がありました。足利学校にある『四書大全』はその明の時代の永楽13年(1415年)8月に印刷されて世に出た22冊で一組という本で、日本に入ってから藤原惺窩という学者と鶴飼石斎という学者が読みやすいように工夫をこらし、遅くとも寛文4年(1664年)に世に出した貴重な本です。

実はその足利学校にある『四書大全』と同じ『四書大全』がわが黒羽小学校(昔の黒羽藩校作新館)にもありました。明治5年7月に調査が行われた時には確かに昔の黒羽藩校作新館の中にあつたことが確認できます。しかし、その後は『万葉集』と同じように昔のお殿様であつた大関家のものとなり、大正4年(1915年)11月に大関家から寄付を受け、再び黒羽小学校のものとなっております。ただ虫に食われたり、くさってきたりしては大変だということで今は「黒羽芭蕉の館」に移され、大切に保管されております。

その昔は黒小にあつたが、今は「黒羽芭蕉の館」にある『四書大全』の中に『中庸』という本が入っております。もうすぐ新しく天皇になれる今の皇太子様は昭和35年の2月にお生まれになりました。その約一週間後、「命名の儀」という儀式が行われ、「徳仁」というお名前と「浩宮」という宮号(呼び名)が付けられました。「徳」や「浩」は実は『中庸』の中から採られたと言われております。その『中庸』には

肫々其仁淵々其淵浩々其天苟不固聡明聖知達天徳者其孰能知之

という文章が出て来ます。この中には確かに「徳」という字や「浩」という字、また「仁」という字も出て来ております。もうすぐ新しく天皇になれる今の皇太子様のお名前や宮号(呼び名)は確かにここから採ったものであらうと思われま

なお、上の文章は

肫 肫 たり 其の 仁、淵 淵 たり 其の 淵、浩 浩 たり 其の 天。 苟 も 固 に 聡明聖知 に して、天徳 に 達 する 者 に あら ず ば、其れ 孰 能 く 之 を 知らん。

と読みます。これで読み方はわかったかもしれませんが、意味はなかなかわからないでしょう。実はこれは

(本当に立派な人、その人のリーダーとしての態度は)手厚く丁寧で優しさそのものであり、天下の偉大な根本である偏らない変わらない物を作って行くさまは、静かで奥深くてまるで深い淵そのものようであり、天地自然が物を作りそれを育てて行くのを手助けするさまは、広々としていてまるで天そのものようである。本当に優れた聡明さとずば抜けた知恵とを備え、この世のすべてのものを育てて行く大きな大きな自然の働きにまで届いているような人でなければ、一体誰がその思いを知りやり遂げることができるであらうか。(完全な誠の思いを身に備えた本当に立派な人の思いは、本当に立派な人であつ

てこそ初めてわかるものなのだ。)

といったような意味です。ちょっと難しい所もあるかもしれませんが、新しく天皇になられる皇太子様のお名前や宮号（呼び名）にはこの世のすべての物を生み育てて行く自然の働き、まるでそれを身に付けているようなまるで大空のような広い心を持った人になって欲しいという意味が込められていたことがわかります。

私たちのふるさと、栃木県には例えば足利市や旧黒羽町など、古くて大変価値のある書物がたくさん残っている町があります。昔の足利学校の生徒さんたちや先生たちも私たちの大先輩である昔の黒羽藩校作新館の生徒さんたちや先生たちも『万葉集』や『四書大全』を直接手にして学んでいたのです。

なお、宇都宮にある作新学院はわが黒羽小学校と同じく、昔の黒羽藩校作新館の流れをくむ学校です。わが黒羽小学校と同じように宇都宮の作新学院にも『万葉集』や『四書大全』を直接手にして学んでいた大先輩たちの心意気が引き継がれているのです。

平成31年4月16日 黒羽小学校昭和44年度卒業生 大沼美雄